

さかいたけおの「母乳育児奮闘記」

さかいたけお赤ちゃんこどもクリニック 塚 武男

第10回 「アッと驚く区役所からの授乳指導」

こんな「指導」が保健センターでされています。

ある日、三人の女の子をお持ちのお母さんが少し血相を変えて私の診察室に入ってきました。

このお母さんは上のお子さんは2歳半まで、下のお子さんは双子ですが二人とも完全母乳で頑張っています。

三人とも私のクリニックに通院しており、母乳育児や離乳食の相談も全て受けています。

その方が某区役所の「離乳食指導」を受けてその内容のあまりのひどさにあきれ返り、それを訴えにきたのでした。聞いてみると、なるほどあまりにもひどいものでした。

1. 「離乳食開始までに授乳回数を減らしなさい」

その理由は、赤ちゃんが空腹を覚えることで離乳食を欲しがるようになるというものでした。それで、現在二人とも8-9回の授乳回数ですが多すぎるので4時間は空けなさいと言われたようです。

ちょっとあきれ返る内容です。まず赤ちゃんに空腹を覚えさせるという感覚ですね。これが母子保健に関わる人間の発想であることに驚きます。5-6ヶ月の赤ちゃんは空腹を「覚えません」。ただお腹がすいて泣くだけです。この時それまで完全母乳であれば当然母乳を欲しがります。「離乳食を下さい」とは当たり前ですが考えません。言ってみれば虐待行為に近いものです。それと授乳間隔を無理に空ければ乳腺炎にもなりやすく、母乳分泌量の低下にもつながります。

2. 「赤ちゃんを空腹で泣かせることが肺の発達につながります。」

だから空腹にして泣かせることが肺の発達につながります。」

えっ？ですね。私は現役の新生児科医時代は新生児—乳児期の呼吸生理の研究を専門にしていたのですが、その立場から言えばそんな根拠の無い内容、いわば嘘ですね、をお母さんたちに言っているのでしょうか？肺の発達に極めて複雑ですが基本的には肺胞数の増加が重要でそれは年齢の増加に従い、13歳まで続きます。この間、泣いたから肺胞数が増えるという様なことはありませんので、泣けば肺の発達が良くなるなどは少なくとも医療者たるものがお母さん達に話すべきことではありません。そんないい加減なことを公的な場で言うのは止めて下さいですね。

ちなみに出生直後の啼泣を伴う第1呼吸が肺の拡張と呼吸の確立に重要であると昔の教科書には書いてありましたが、現在では胎児期の肺胞液の吸収と呼吸の確立はそんな単純なものではなく、NaやClの能動輸送、陣痛によるエピネフィリンの上昇などのかなり複雑なメカニズムによる

ことが分かっています。

最近のお産では赤ちゃんは早期母子接触でほとんど泣きませんが呼吸は安定していますね。この事実がそれを物語っています。

話を戻しますが、いい加減なことが色々のところで「指導」の名前で行なわれています。母子は混乱に陥るだけです。何とかしないといけないですね。